

新刊紹介

◇飛鳥・奈良時代の文化

羽田 亨編

飛鳥・奈良時代の佛教の受容という後世におけるわが國文化の展開の一方向を決定的なものとした時期としてわが國文化史上重要な位置を占めており、これが研究史は多大の成果を残している。本書にも指摘しているごとく、それらの成果にもまして望蜀せられるのは、當時文化發達の根源となつた隋唐文化の奥底を究めた人々により、多少の補正を期待し得べき點が存するということである。本書はかかる課題を中心に、主として中國文化の研究に従事しながら、それがわが國に及した影響についても不斷の注意を拂つて來た諸氏が、それぞれの専門の立場から述べたものでわれわれのかかる希望を充てくれるものである。關西經濟同友會での講演をまとめたもので、從來の諸説を檢對しつつ、その透徹した史眼に映じたところを要約して講述したもので

ある。(三十年五月刊。A5一二三頁。非賣品。武田藥品工業株式會社)

◇修學院離宮の復原的研究

森 蘊著

奈良國立文化財研究所學報2に收められたもので、桂離宮とともにわが國庭園の双壁と推獎される修學院離宮の建築と庭園の復原的研究を試みたものである。これが調査に當つては、造園學のほか、地形學・土木工學をも應用し、併せて宮内廳書陵部をはじめ、各地の未公開の資料を驅使し、遺構・文獻學の兩面より離宮造營當初の事狀を明らかにしようとした。また、造營以前の地形、また別個に作者、作者の作意の問題、桂離宮との比較検討をも加え、創始の修學院離宮の創意が如何に優れたものであつたかを明らかにしている。現在は再三の改造を経てその遺構を傳えているが、本書を一讀することにより嘗ての優れた遺構の全貌を想定し改めて修學院離宮の文化史上における意義を了解せしめうる。(二十九年八月刊。B6百三十頁。非賣品。養

德社)

◇佛師運慶の研究

小林 剛著

奈良國立文化財研究所學報1に收められたもので、佛師運慶の傳記と彼の作品について嚴正なる批判を加えて、その文化史上とくに藝術史における價值を鮮明にせしめようとしたものである。わが國の彫刻作家の中で運慶ほど著名で、且つ事蹟のすぐれたる人はなかつた。従つて、現在諸彫像の作者傳承の多くが彼に比定されているが、著者は適確な文獻資料の批判と遺品の檢討により、運慶の手にかかる作品を嚴選し、彼の傳記と、その作品の藝術學的評價を明らかにした。そして、わが國彫刻史上一時を劃するものであることを説いている。(二十九年八月刊。B6百五十頁。非賣品。養德社)

◇重源上人の研究

南部佛教研究會編

鎌倉時代における東大寺再興の文化史

的意義は既に十分の検討をみ、それがそのまま舊佛教復興の問題として過大に評價されている。ところがその復興を促進した勸進上人重源の傳記について固却されていた感があつたが、本書はそうした點を補うものとして重視されよう。南都佛教の別冊として、重源上人七百五十回を記念して出版されたものであるが、その内容は、史學・民俗藝術等それぞれの立場から重源上人の生涯の事蹟を検討し、求心的に重源上人像を適確に映像せしめている。と同時に、鎌倉時代における佛教文化の特質についてまで論究し、こうした中において重源上人の地位を理解せしめてくれるものである。(三十年七月刊。A5三八〇頁。會員配布南都佛教研究會)

◇岡山縣古文書集

藤井 駿・水野恭一郎編

戦後、地方史研究の普及とともに、地方史編纂の運動は各地にみられ、その業績は枚擧に耐えない。地方史編纂の要望されるところは、各地方におけるそれぞ

れの地域の文化復興を計るとともに、各地に散在する諸資料の集收ということにあると云われるが、本書はまさかある使命を二分して、地方史編纂の基礎となる資料の集收とその出版を計畫實現されたものである。とくに各地に散在する一、二の古文書集收編纂の困難なことは申すまでもないが、本書は岡山大學を中心として岡山縣下における社寺舊家等の殘藏にかかる古文書を調査編集し、且つそれに適切な解説を加えている。(二十八年三月刊。A5二二八頁。岡山縣共同印刷製本株式會社)

◇中日文化論集

劉 百 閱 等著

本書は我が國の前田多門、宇野哲人兩先生が一九五四年臺灣教育部及び中日文化經濟協會の招聘に依り渡臺されしを記念して出された論文集で、我が國と中國の文化交流に關するものを主に、我が國の歴史、漢學關係のものから武士道及び國民性にも言及し、又大まかながら現代日本の漢學者の近況等々が含まれて居

る。(民國四四年(1955)四月刊。B6三四五頁、非賣品、中華文化出版事業委員會)

◇國語譯親鸞書簡集 續編

——御消息集——

石 田 瑞 磨 譯

本書は先に日本教學研究所の研究事業の一翼として計畫刊行された末燈鈔意譯の續編である。ここに口語譯された書簡は眞宗聖教全書の宗祖部に收められている「親鸞聖人御消息集」、釋善性編「御消息集」、「親鸞聖人血脈文集」及び「拾遺眞蹟御消息」の中から御消息としては不當なもの一二を除いた全十九通である。(三〇年五月刊。B6。八七頁。一〇〇圓。大藏出版社)

◇親鸞聖人全集 和讃篇

本書は親鸞聖人の七百回忌を記念して刊行を企圖された親鸞聖人の第一回配本である。従来、聖人撰述の刊行に際し、底本選定について十分な吟味がなされていなかったため、今回は特に現存の自筆

本、書寫本、轉寫本など出来る限り正確なものを選ぶことによつて萬全を期している。本篇に収める和讀は專修寺藏國寶眞蹟本等を底本とし、特に文明五年蓮如上人の發願で開版せられた三帖和讀を底本と對照出来る様に編集されている。(三〇年六月刊。一七・五×二〇・五。三四四頁。三五〇圓。親鸞聖人全集刊行會)

◇讀みの實驗的研究

——音讀にあらわれた讀み
あやまりの分析——

國立國語研究所報告 9

本篇は國語教育の實際面についての調査研究であつて、特に音讀を手がかりとして明らかにされた讀みあやまりの類型とそれらの豫想される原因とを詳細に報告するものである。その目的は兒童が文學言語に接してどの様な困難、障害、抵抗を示すかを明かにし、豫想される原因を推定することによつて、國語の文字言語の面への改善にヒントを與え、國語の學習指導の面への改善の資料を提供することにある。(三〇年五月刊、A5、二八三頁、三〇〇圓、秀英出版)

◇觀經玄義分講要

昭和三十年安居

柏原 祐義述

善導大師の觀經疏撰述の意圖は淨影寺慧遠をはじめとする聖道諸師や攝論家諸師の觀經解釋が何れも一經の正意である凡夫人報の要路を閉ざし、念佛の願生を釋尊の別時意方便説であると貶したのに對し、古今楷定を目的として一には諸師や攝論家の誤りを匡し、一には恩師道綽禪師の安樂集の幽意を顯彰し、以て「上來雖說定散兩門之益、望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名」(散善義)なる觀經の正意を闡明することにあつた、本書は本年度安居の講本である。(三〇年七月刊。A5。三三四頁。非賣品。大谷大學內安居事務所)

◇明治文化史③教育道德篇

村上 俊亮
坂田 吉雄 編

本書は教育及び道德を兩篇に分け、教育篇では日本近代教育の基礎となる明治時代の教育を問題史的に取り上げ、これ

を回期、即ち徳川幕府末に既に現はれて來た教育近代化の黎明期ともいふべき時期を第一期に、日本近代教育の試行期ともいふべき文部省設置と共に全國的に統一された時期を第二期に、明治十九年の學校令を契機として、國家主義的な體制が整備された時期及び教育勅語により、その基礎を確立する時期を第三期に、明治三十年代に入つて、以前の教育に對して全面的檢討を加へ教育制度全體の再整備され、擴充されて行く時期を第四期として教育問題の發展段階をとり上げたものである。又道德篇では幕末期より始まり明治時代を十年毎に區切り、この時代の一般國民の道德思想の流れを記述するに止まらず、その根據より説明し、又これら種々の流れのからみ合いを明らかにされたものである。兩篇とも卷末に詳細な年表を附して讀者の便を計つて居る。(三〇年三月刊。A5六六八頁。一〇〇〇圓、洋々社)

◇明治文化史 ④社會經濟篇

澁澤 敬三 編

我が國の社會經濟が、開國以來の歐米先進諸國からの近代的産業技術、及び經濟制度の移植に依り、如何に變化したか、又衣食住の生活資料の生産や流通事情の變化につれて社會の狀態がどの様に變化したかと言ふ事を重點に於て書かれた明治時代社會經濟の發達、發展史である。卷末に他卷と同様年表が附されてある。(三〇年三月刊。A5六〇八頁、一〇〇〇圓、洋々社)

◇四分律比丘戒本講讀

西本 龍 山 著

昭和三十年度夏安居の講録として著作せられ、小乘律としての四分律比丘戒本が大乗菩薩學人の基調として任持すべき戒本なることを著者の基本的態度として指標している。講録の形式に順じ序講、本講、結講に三大別し、序講に於ては「現存律藏への感謝」以下七項に亘つて戒律總論が述べられ、本講戒文解釋に於ては句讀點返假名を附した漢譯本文とその一々の講述がなされている。(三十年七月刊。A5三六〇頁。安居事務所)

◇談話語の實態

國立國語研究所編

従前比較的に調査研究の進められて、いゝる書きことばの研究に比し、調査研究の非常に乏しい話しことばについての基礎的研究で、同研究所に於けるその成果の一部をまとめ、研究所報告8として發行せられたもの。本文は調査の概要、イントネーションの調査、文、文節、語の長さ文の構造、語の種類、使用度数、用法調査への反省、參照文獻の諸項に分れ、卷末に事項索引圖表數表一覽を附する。(三十年三月刊、B6、一九五頁、國立國語研究所)

彙 報

眞 宗 學 會

◇關東聖蹟巡拜旅行

數年來學會の懸案となつていた關東の聖蹟巡拜旅行を擧行した。參加者、二村教授引率のもとに上杉助手以下十名。巡拜コース次の通り

七月七日朝練馬 出發↓(石下)東廣寺
(一泊)↓(下妻)光明寺↓(結城)稱名寺
(高田)專修寺(一泊)↓(板敷)大覺寺
(福田)西念寺(一泊)↓(笠間)光照寺
(河和田)報佛寺↓(酒田)善重寺↓
(水戸)願入寺↓信願寺(一泊)↓(金澤)法龍寺↓十一日午后五時宇都宮驛にて解散。

◇九月二十三日 例會 於會議室

「宗祖の假名聖教に現わる田舎の人々に就て」

講 師 正親教授

出席者

武生、二村、藤原教授、上杉助手、他助手二名、學生二十名